

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY

2019.1
No. 740



目次

[巻頭言]

- 「猪突猛進」を止める 5131
総長 山極 壽一

[大学の動き]

- 名誉教授懇談会を開催 5133
- 京都大学北米拠点を開設 5134
- 第11回東南アジアネットワークフォーラムを開催 5135
- 第2回京都大学-ハンブルク大学国際シンポジウム
2018を開催 5136
- 平成30年度定年退職予定教員 5138

[部局の動き]

- 第11回次世代グローバルワークショップを開催 5141
- 教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公
開講座『不可知なもの-ことばによる思考を超える
心の機能と心の変化』を開催 5142
- 平成30年度京大関係病院長協議会定例総会を開催 5142
- 京大病院オープンホスピタル2018を開催 5143
- 「京都大学・ボゴール農業大学-アジアにおける地球
環境学教育・研究に関する国際シンポジウム」を開催 5144
- インドネシア京都大学同窓会を開催 5145
- 京都-インドネシア・ボゴールの留学フェアを開催 5146
- 山極壽一 総長ら一行がボゴール農業大学学長を
表敬訪問 5147
- 化学研究所「第118回研究発表会」を開催 5148
- 第34回(2018)京大賞記念ワークショップ(基礎
科学部門)を開催 5149

- 福井謙一博士生誕百年記念行事を挙行 5150
- 福井謙一博士生誕百年記念サテライトシンポジウム
を開催 5152
- 第100回京都大学丸の内セミナー記念式典/特別
講演会「人文・社会科学の未来」を開催 5153
- 物質-細胞統合システム拠点(iCeMS)がフランス
国立科学研究センター(CNRS)と国際共同研究室
「スモラボ」を開設、調印式を実施 5154
- 米国にて京都大学-UCLA合同国際シンポジウム
「物理学の進展と医学応用」を開催 5155

[寸言]

- 「偶然」を生み出す京大の不思議 市森 友明 5158

[随想]

- “森づくり”を楽しむ 5160
名誉教授 竹内 典之

[洛書]

- 留学生たちと接するようになって 加藤 源太 5161

[話題]

- 平成30年度総長杯ディスクドッジ大会を開催 5163
- 平成30年度京都大学社寺見学会を実施 5163
- 宇治キャンパスで総合防災訓練を実施 5164
- 宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を開催 5165
- 宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催 5166



京都大学



巻頭言

「猪突猛進」を止める

総長 山極 壽一

みなさん、あけましておめでとうございます。

今年は亥年です。イノシシと言えば「猪突猛進」という言葉がすぐ頭に浮かばれると思いますが、私はこの猪突猛進を止めることを今年の合言葉にしたいと思っています。

新聞等で若干騒がれましたが、昨年来、私は財務省と国立大学の予算をめぐるずいぶん激しいやり取りをしてまいりました。これは京都大学の総長という立場ではなく、国立大学協会の会長としてどうしても強い姿勢で臨まなければならないと思ったものですから、つつい厳しい言葉を言ってしまったわけで、ちょっと反省もしていますが、今年は大学改革の本丸になるのではないかと考えています。

昨年来、大学改革の動きは非常に速くなりました。昨年1月に国立大学協会は「高等教育における国立大学の将来像」という提言を公表しました。そこにはまだ大学間連携や複数大学の一法人化、連携法人などという構想があまり具体的には盛り込まれていませんでした。ところがその矢先、名古屋大学と岐阜大学が一法人化するという話が急に出てきて、それを後追いするように北海道の3大学（小樽商科大学、帯広畜産大学、北見工業大学）、浜松医科大学と静岡大学、奈良教育大学と奈良女子大学、等々が名乗りをあげました。国立大学ばかりではなく、私立大学、そして公立大学にも同じような動きが広がっています。今春には大阪市立大学と大阪府立大学の運営法人が統合するという予定ですし、今年はそういった動きがどんどん出てくるだろうと思います。

ただ私は、コスト削減のために合併統合するというのはよくないと思っています。それぞれの大学が持っている個性、ミッションといったものがより具体的に実現するならば、そういう改革もありうると思いますが、むやみに統合、合併してはいけないと思います。特に内閣府等々で産業界の人がよく口にするのですが、既に1990年代から21世紀の初めに企業は多くの合併統合をやってきたのだから大学だけが例外ではないだろうというわけですが、実際に合併統合して失敗した企業はたくさんあります。しかも、利潤の追求を目標とする企業、教育・研究を根幹とする大学とでは、その経営理念・手法が全く違います。それを同じように考えてもらっては困るというのが私の考えで、やはり大学という組織はもっと先を見て、地道な改革をしながら、本当にこの激動の世の中できちんと自立し、未来を支えていける人材を育てるということを大きな目標にしなければならないと思います。

昨年、京都大学も財政を自立して運営していくことを目標に掲げて、京大オリジナルという会社を立ち上げました。これは、産業界からもずいぶん大きな注目を集めています。大学発ベンチャーを支援し、大学のシーズを企業のニーズに結びつけるコンサルタント事業を展開することが目標です。昨年末の中央教育審議会の答申でも「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」が発表され、その中に地域連携プラットフォームの構築が大きな目標として掲げられてい



巻頭言

ます。これは、大学を中心として行政や産業界が一緒になって、地域の発展のために尽くせるようなプラットフォームを作るということですが、具体的な内容はまだ決まっていません。私自身は、この京大オリジナル等々がその中核的な役割を果たしながら、地域の行政や地域の産業を巻き込んで発展していくものと考えております。

ただ、京都大学は地域の星を目指すという目標を掲げているだけではありません。もちろんのことですが、これまでのように世界を牽引する研究型大学として、そして、充実した教育を展開する総合教育・研究大学として、歩み続けていかなければなりません。そのためにみなさんは、心一つにして、長い道のりをきちんと見据えながら、しっかりした計画を立てていただきたいと思います。私の任期も残すところ2年を切りました。この2年弱の間に、京都大学という大きな財産を、次の執行部にきちんとつないでいくことを、もう一つの目標にさせていただこうと思っています。

京都大学には今、新しい動きがたくさんあります。本庶 佑先生が昨年、ノーベル賞を受賞されました。これは大きな弾みになっております。基礎研究の重要性が認められ、来年度は科学研究費が増額されることになりました。やはり、ノーベル賞を受賞すればずいぶん政治が変わる。そういうことを目の当たりにして、京都大学の先生方、そして、職員のみなさんの地道な努力が国際的に評価されれば、日本を動かせるのだと実感しました。

ぜひみなさん一人ひとりが猪突猛進を止めて、この1年をしっかりと見据え、地道ではあるけれども、それが大きな力に結びつくような取り組みを計画し実行することを心掛けていただきたいと思っています。今年1年のみなさんのご活躍を切に期待いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

名誉教授懇談会を開催

11月18日(日)、百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、第91回名誉教授懇談会が開催され、72名の名誉教授の他、総長、理事、監事、部局長等合わせて90名が参加しました。

秋に行われる名誉教授懇談会では、当該年度に名誉教授の称号を授与された教授(文系・理系各1名)による講話会を行うことが慣例となっており、文系からは伊藤之雄 名誉教授(法学研究科)による「近代日本の天皇制」、理系からは美濃導彦 名誉教授(学術情報メディアセンター)による「情報革命再考」と題した講演が行われました。

その後の懇親会は、山極壽一 総長による本学の近況を交えた挨拶に続いて、北野正雄 理事・副学長による乾杯の発声により始まりました。会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告等に話が弾み、盛会のうちに執り行われました。



伊藤名誉教授



美濃名誉教授



挨拶をする山極総長



乾杯の発声をする北野理事・副学長



懇親会の様子

(総務部(総務課))

[目次に戻る ↗](#)

京都大学北米拠点を開設

10月1日付で米国ワシントンD.C.に京都大学北米拠点を設置し、10月15日よりオフィスの運用を開始しました。

京都大学北米拠点は、北米地域において、米国東海岸を中心として本学のプレゼンス向上を促進し、各部局の国際交流活動を支援するとともに、学術交流活動および教育・学生交流活動に関する調査および情報収集を行うために設置したもので、国際戦略本部のネイサン・バデノック (Nathan Badenoch) 特定准教授を拠点所長に任命しました。

ワシントンD.C.は米国の政府、教育研究機関および我が国の行政機関等が多数集積する地域でもあることから、米国で築いたネットワークを基盤に京都大学の卓越した教育研究成果等のさらなる発信を図ることが期待されます。

【設置場所】

Kyoto University North American Center

2200 Pennsylvania Avenue, N.W., 4th Floor East, Room 4057, Washington, DC 20037

【人員体制】

拠点所長 1名 (国際戦略本部特定准教授)

(ジョン万プログラム (海外長期派遣) によりワシントンD.C.で研修中の本学事務職員がこれを一部補佐する)

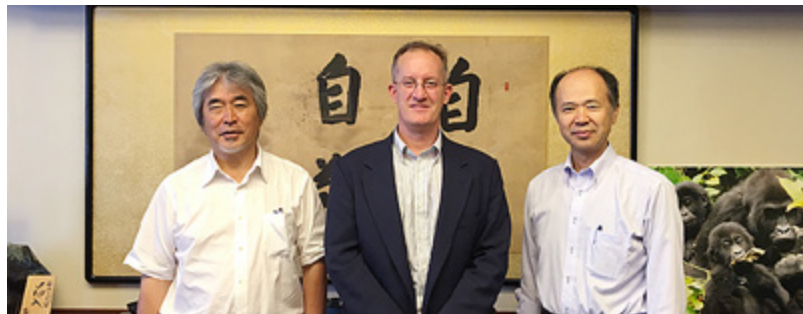
【主なオフィス活動】

- ①東海岸を中心とした北米地域における本学のプレゼンス向上活動
- ②部局等の国際交流活動の促進・支援
- ③学術交流活動および教育・学生交流活動に関する調査および情報収集



【写真左】北米拠点が入居するビルの外観

【写真右】北米拠点事務所の内観



左から山極壽一 総長、バデノック北米拠点所長、山本淳司 国際戦略本部担当部長 (兼) 副本部長

(国際戦略本部)

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

第11回東南アジアネットワークフォーラムを開催

インドネシア・西スマトラ州パダンにて、第11回東南アジアネットワークフォーラムを10月29日(月)～30日(火)に開催しました。このフォーラムは、本学元留学生によるインドネシア京都大学同窓会(HAKU)、京都大学ASEAN拠点と東南アジア地域研究研究所が共催で行ったもので、本学からは、稲葉カヨ 理事・副学長のほか、経営管理大学院、工学研究科、エネルギー科学研究科の教員が出席しました。

本フォーラムは、元留学生が現地で組織する同窓会と連携して本学の最新研究成果を現地に還元することを最大の目的としており、現地社会が最も関心を寄せていることを学術テーマとしてとりあげています。インドネシアでの開催は、2007年度から2014年度までHAKUが毎年開催してきた京都大学東南アジアフォーラム、2015年度からその規模を拡大した東南アジアネットワークフォーラムを合わせると、今回で12回目となりました。

また、今回のフォーラムは、サスティン・ソサエティ(Sustain Society)、アングラス大学(Andalas University)が主催する第7回人間安全保障のための持続的な未来国際会議(7th Sustain International Conference on Sustainable Future for Human Security)、第3回熱帯地域におけるグリーン開発国際会議(3rd International Conference on Green Development in Tropical Regions)との合同開催となりました。

1日目は、稲葉理事・副学長の挨拶に始まり、ラフマツ・ウィトラール(Rachmat Witoelar)大統領気候変動特使(President's Special Envoy for Climate Change)、本学の小林潔司 経営管理大学院教授ら4名の基調講演に続き、午後からはテーマ別の研究発表が行われました。2日目は、本学の速水洋子 東南アジア地域研究研究所長をはじめ、マレーシア、オランダ、インドネシアの研究者が基調講演を行い、150名に及ぶ参加者が熱心に耳を傾けていました。また、夜にはイルワン・プライトノ(Irwan Prayitno)西スマトラ州知事(West Sumatra Governor)を交えて和やかな交流会が開催されました。



稲葉理事・副学長による挨拶



ウィトラール大統領気候変動特使による基調講演



速水所長による基調講演



小林教授ら基調講演者による質疑応答

大学の
動き

本フォーラムには、京都大学マレーシア同窓会 (MyKyoto) からの同窓生も参加しており、国を超えた同窓会間での交流、同窓会を軸にした新たな研究者交流の可能性など、今後の相互発展について意見交換を行いました。(後日開催された同窓会の様子は本誌P.5145をご覧ください。)



全体集合写真



インドネシア京都大学同窓会 (HAKU) 集合写真



プライトノ知事を交えた交流会

(企画・情報部(企画課))

[目次に戻る ↗](#)

第2回京都大学-ハンブルク大学国際シンポジウム 2018 を開催

京都大学は、ハンブルク大学と共同で「The 2nd Kyoto University-Universität Hamburg Symposium 2018」を10月9日(火)～11日(木)に開催しました。本学とハンブルク大学に加え国立台湾大学もオブザーバーとして参加し、計100名を超える研究者らが集いました。

2017年6月にハンブルクにおいて開催された第1回シンポジウム以降、ハンブルク大学とは

大学の
動き

人文社会学から自然科学にいたる幅広い分野で活発な交流が行われてきました。第2回目の本シンポジウムではこれらの交流を発展させるとともに、新たな連携が期待される分野の研究者交流創出を目指し、第1回シンポジウムで実施した「法学」、「社会学」、「経営」の人社系3分野に加え、新たに「ロジスティクスにおける情報技術」、「生態学」、「開発学」、「気象」の地球規模課題に関する4分野の分科会を実施しました。

10月9日(火)の山極壽一 総長主催のオープニングディナーでは、シンポジウム参加者に加えて、来賓としてヴェルナー・ケーラー ドイツ総領事を迎え、和やかな雰囲気の中交流を深めました。

10日(水)の開会式では、山極総長、ディーター・レンツェン ハンブルク大学学長による開会挨拶に続いて、ケーラー総領事より挨拶がありました。その後、両大学の研究者が7つの分科会に分かれて研究を発表し、活発な議論を行いました。

11日(木)の全体セッションでは、各分科会の代表者が議論の内容と今後の協働に向けた展望を報告した後、ドロテア・マーンケ ドイツ学術交流会東京事務所長、増子則義 日本学術振興会国際統括本部長が日独交流助成事業を紹介しました。最後に、ヤン・ルイス ハンブルク大学副学長、稲葉カヨ 理事・副学長による挨拶をもって、シンポジウムは閉会しました。

【関連リンク】

The 2nd Kyoto University-Universität Hamburg Symposium 2018

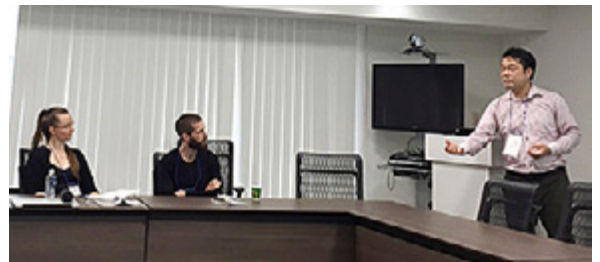
<http://www.oc.kyoto-u.ac.jp/symposium/kyoto-hamburg-symposium2018/>



山極総長の開会挨拶



レンツェン学長の開会挨拶



社会学セッションの分科会



集合写真

(企画・情報部(国際交流課))

目次に戻る ↗

大学の
動き

平成30年度定年退職予定教員

京都大学教員定年規程により、教員62名(教授52名, 准教授6名, 講師1名, 助教3名)が本年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文学研究科	田 口 紀 子	文献文化学専攻 西洋文献文化学講座	フランス語学, 特にテキスト言語学の研究
	福 谷 茂	思想文化学専攻 思想文化学講座	カントを中心とする西洋近世哲学史, 特に形而上学史の研究
	藤 田 和 生	行動文化学専攻 行動文化学講座	霊長類, 鳥類, 伴侶動物を対象とした, 知性と感情, およびその進化の過程に関する比較認知科学的研究
	林 晋	現代文化学専攻 現代文化学講座	数学史の研究, 京都学派の思想史文化史的研究, 人文情報学の研究, 情報と社会の歴史学的・社会学的研究
経済学研究科	小 島 專 孝	経済学専攻 経済理論講座	理論経済学
	稲 葉 久 子	経済学専攻 現代経済学講座	教育管理行政学, 経営学, 文化人類学・民俗学
理学研究科	大鍛冶 隆 司	数学・数理解析専攻 解析学講座	偏微分方程式の解の構造に関する現代解析的研究
	重 川 一 郎	数学・数理解析専攻 基礎数理講座	確率論に関する研究
	青 山 秀 明	物理学・宇宙物理学専攻 相関重力基礎論講座	経済物理学における企業・金融機関のなす経済ネットワーク上のダイナミクスの研究
	中 西 一 郎	地球惑星科学専攻 相関地球惑星科学講座	地震波を用いた地球内部構造と地震発生過程に関する研究
	土 山 明	地球惑星科学専攻 地球物質科学講座	地球外物質(宇宙塵, 隕石)の鉱物学的研究
	丸 岡 啓 二	化学専攻 有機化学講座	有機触媒化学に関する研究
	竹 田 雅 彦	附属地磁気世界資料解析センター	地磁気変化, 特に静穏日日変化についての研究 電離層ダイナモおよび電気伝導度についての研究
医学研究科	三 森 経 世	医学専攻 内科学講座	膠原病・リウマチ性疾患・自己免疫疾患の病態解明および診断と治療法開発に関する研究
	木 原 正 博	社会健康医学系専攻 国際保健学講座	アジア, アフリカ地域における感染性, 非感染性疾患の社会文化的, 行動学的背景に関する社会疫学的研究
	木 原 雅 子	社会健康医学系専攻 国際保健学講座	日本およびアジア・アフリカ地域の感染性・非感染性疾患の社会文化的/行動学的予防に関する社会疫学的研究
工学研究科	石 田 毅	社会基盤工学専攻 資源工学講座	岩盤力学, 特に地下深部開発に関わる地圧状態と破壊音の測定による岩盤破壊に関する研究
	木 村 健 二	マイクロエンジニアリング専攻 ナノサイエンス講座	高速イオンと物質の相互作用に関する研究
	功 刀 資 彰	原子核工学専攻 核エネルギー工学講座	混相流の基礎物理と計算科学研究 原子炉の伝熱流動研究と安全性 核融合炉の電磁流体力学研究と安全性

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
工 学 研 究 科	木 村 俊 作	材料化学専攻 高分子材料化学講座	ペプチド分子の分子組織化とバイオマテリアルやナノ電子材料に展開する研究
	辻 康 之	物質エネルギー化学専攻 触媒科学講座	均一系遷移金属触媒反応に関する研究
	長谷部 伸 治	化学工学専攻 化学システム工学講座	プロセスシステム工学, プロセス制御, マイクロ化学プロセスに関する研究
農 学 研 究 科	稲 村 達 也	農学専攻 耕地生態科学講座	日本と中国における農業生態系保全と高生産かつ持続的農業生産システムの構築に関する現地実証的研究
	植 田 和 光	応用生命科学専攻 応用生化学講座	ヒト ABC 蛋白質の生理的役割と作用メカニズムに関する研究
	間 藤 徹	応用生命科学専攻 分子細胞科学講座	植物の栄養元素に関する研究
	三 上 文 三	応用生命科学専攻 生物機能化学講座	食糧タンパク質および食糧関連酵素の構造生物学的研究 アミラーゼのタンパク質工学
	山 田 雅 保	応用生物科学専攻 動物遺伝増殖学講座	哺乳動物初期胚の発生調節機構に関する研究
	久 米 新 一	応用生物科学専攻 動物機能開発学講座	動物の腸管免疫の解明に関する研究 環境保全型乳牛・肉牛飼養システムの開発に関する研究
	左 子 芳 彦	応用生物科学専攻 海洋微生物学講座	ゲノム情報を用いた海洋微生物の生理・生態学的研究
	平 井 伸 博	比較農業論講座	生物間相互作用に関する天然物化学
	川 島 茂 人	地域環境科学専攻 地域環境管理工学講座	生態系における大気生物やガスなど各種物質の動態メカニズムの解明と拡散過程のモデリングに関する研究
	河 田 照 雄	食品生物科学専攻 食品健康科学講座	健康維持や病気の予防に寄与する食品の機能性および当該機能の分子レベルでの作用メカニズムに関する研究
人 間 ・ 環 境 学 研 究 科	小 山 静 子	共生人間学専攻 人間社会論講座	近代日本における人間形成史に関する研究
	齋 藤 治 之	共生人間学専攻 言語科学講座	トカラ語およびゲルマン語を中心としたインド・ヨーロッパ祖語の動詞体系の研究
	藤 田 糸 子	共生人間学専攻 外国語教育論講座	英語教育, 特に, 大学院生を対象とした英語教育に関する研究 大学の国際化および国際教育に関する研究
	高 谷 修	共生文明学専攻 歴史文化社会論講座	十八世紀英文学研究
エ ネ ル ギ ー 科 学 研 究 科	東 野 達	エネルギー社会・環境科学専攻 エネルギー社会環境学講座	エアロゾルの環境動態と社会経済活動が誘引する環境影響に関する研究
ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科	太 田 至	アフリカ地域研究専攻 アフリカ潜在力講座	アフリカ牧畜社会における家畜管理と認識・分類, 所有と交換, および民族間関係に関する人類学的研究
	小 杉 泰	グローバル地域研究専攻 平和共生・生存基盤論講座	イスラーム学, 中東地域研究, 国際関係学, 比較政治学, 比較文明学, イスラーム思想史に関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
情報学研究科	石 田 亨	社会情報学専攻 社会情報ネットワーク講座	自律エージェント群に関する研究 とその社会情報システムへの応用
	杉 江 俊 治	システム科学専攻 人間機械共生系講座	システム制御工学に関する研究
	佐 藤 亨	通信情報システム専攻 集積システム工学講座	レーダー信号処理に関する研究
生命科学研究所	根 岸 学	高次生命科学専攻 高次応答制御学講座	神経軸索ガイダンスに関する研究
地球環境学堂	渡 邊 紹 裕	資源循環学廊	農業・農村における用排水管理と 水環境に関する研究
公共政策連携 研 究 部	西 村 尚 剛	公共政策第二講座	証券市場のエンフォースメントの 研究 政策決定, 予算編成等の実務につ いての研究
経営管理研究部	小 林 潔 司	経営管理講座	計画・マネジメント論
化学研究所	梅 谷 重 夫	環境物質化学研究系	金属(特にレアメタル)に対して高 選択的な有機配位子の分子設計, および溶媒抽出, 固相抽出への応 用
	小 澤 文 幸	附属元素科学国際研究セ ンター	機能性有機遷移金属錯体の創製と 応用に関する研究
	伊 藤 嘉 昭	附属先端ビームナノ科学 センター	原子・分子内の電子相関に関する X線分光学的研究
ウイルス・再生 医科学研究所	瀬 原 淳 子	再生組織構築研究部門	骨格筋を中心とする発生・再生・ 幹細胞分化機構の研究, 宇宙生命 科学に関する研究
エネルギー理工学 研 究 所	木 村 晃 彦	エネルギー機能変換研究 部門	材料の照射効果に関する研究と次 世代原子力材料の開発
防災研究所	森 井 互	附属地震予知研究セ ンター	地殻変動連続観測
経済研究所	岡 田 章	経済制度研究部門	ゲーム理論とその応用に関する研究
数理解析研究所	永 田 雅 嗣	基礎数理研究部門	多様体の手術に関する代数的構造 の解明に基づく変換群論の研究
	向 井 茂	無限解析研究部門	代数幾何学とモジュライに関する 研究
東南アジア地域 研 究 研 究 所	水 野 廣 祐	政治経済共生研究部門	インドネシア地域研究
	西 淵 光 昭	グローバル生存基盤研究 部門	腸炎ビブリオ・コレラ菌・腸管出 血性大腸菌感染症およびデング熱 に関する分野横断的国際共同研究
国際高等教育院	吉 田 和 彦	芸術言語教室	古代アナトリア諸語を中心にした 印欧語比較研究
	加 藤 信 一	数学教室	代数群の表現論の研究
	加 藤 立 久	化学教室	開殻電子状態を持つ分子の電子状 態や分子磁性の分子分光学的研究
	吉 崎 武 尚	統合科学教室	高分子稀薄溶液の物理化学的性質 における高分子量領域から低分子 量領域へのクロスオーバー挙動に 関する研究
情報環境機構	齊 藤 康 己	IT企画室	囲碁の認知科学的研究 人間機械系のインターフェース研 究 セキュリティ対策の認知負荷軽減 研究

(総務部(人事課))

[目次に戻る ↗](#)

部局の
動き

第11回次世代グローバルワークショップを開催

文学研究科を中心とするアジア研究教育ユニットは、11月10日(土)～11日(日)に本部構内文学部校舎で第11回次世代グローバルワークショップを開催しました。今回は2日間で合計81名が参加し、「自己、他者とコミュニティ (Self, Others and Community)」をテーマに、哲学、社会学、文学など人文・社会科学の観点から研究発表および討論を行いました。

落合恵美子 アジア研究教育ユニット長、南川高志 文学研究科長からの挨拶、出口康夫 文学研究科教授の基調講演を行った後、ビジネストレンド、高齢社会とケア、国際関係、宗教と文化、東アジアにおける文化交流、ナショナリズムなど14の分科会に分かれ、海外参加者26名を含む42名の大学院生や講師等による研究報告が行われました。報告者は学内外の教員からのコメントや、他の発表者との議論を通じて自らの研究を研鑽する貴重な機会を得ました。

参加者からは「国際的かつ学際的な研究報告の場であり、また報告者同士だけではなく、教員との交流も図られるという点において意義深く感じた」「他の報告の問題意識の鋭さに大いなる刺激を受けた」「今後も積極的に交流をしていきたい」「京都大学がアジア研究の核となって継続してほしい」といった声が寄せられました。

アジア研究教育ユニットでは次世代の研究者が英語で学術交流を行いやすい環境作りを力を入れてきました。このワークショップをきっかけに、多くの若手研究者が世界に羽ばたいていくことを願います。



出口教授による基調講演



ラウンドテーブル1



ラウンドテーブル2



集合写真

(大学院文学研究科)

[目次に戻る ↗](#)



教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座『不可知なもの—ことばによる思考を超える心の機能と心の変化』を開催

臨床教育実践研究センターでは、毎年、深刻化する教育問題への取り組みの一環として、現代人のこころの理解に主眼をおいた公開講座を開催しています。

今年度は、センター客員教授でルーベン大学精神医学センター部門長のルディ・ベルモート氏を講師として、11月11日(日)の午後1時から、京都テルサのセミナー室で行い、心理臨床家や医療従事者、教育関係者、学生など88名の参加がありました。

講演では、精神分析のなかでもビオンの論じた“不可知なる領域”について、京都学派の哲学や禅思想、脳科学を統合した視点から話されました。特に心の病に苦しむ人に変化をもたらすものとして、非言語次元での直観的な体験を重視し、そうした関わりを生み出す治療者の態度は禅における“無心”に通じると述べられました。講演の後半では、長谷川等伯の松林図屏風や現代のアールブリュット(精神障害をはじめ、社会生活に困難を抱えた人々による芸術)作品などを紹介しつつ“無心”について説明が行われました。

講演後の質疑応答では、非言語性や直観的な体験の心理療法場面における具体的な活用について議論がなされました。多くの参加者が講演に聴き入り、また熱心にメモを取りながら受講している様子が見受けられました。

本講座は例年参加者から大変好評を得ており、来年度以降も、現代社会の複雑なこころの問題を理解するための視点を一般市民に向けて広く提供できる場となるよう開催していくことを考えています。



講演に聴き入る受講者



講演に聴き入る受講者

(大学院教育学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

平成30年度京大関係病院長協議会定例総会を開催

医学部附属病院は、去る10月12日(金)に平成30年度京大関係病院長協議会定例総会を芝蘭会館にて開催しました。本協議会は、同会員である関係病院長が親睦を深めるとともに、医学の進歩発達および病院経営の合理化を企画することを目的として年一回、定例総会を開催しているものであり、学内外から160名余りが参加しました。

定例総会では、稲垣暢也 病院長の開会挨拶、「京大病院の現状」について、滝田順子 教授(小児科長)より新任者挨拶、小西靖彦 教授(医学研究科医学教育・国際化推進センター臨床教育部門長)より「臨床実習について」、妹尾 浩 教授(消化器内科長)、八木真太郎 講師

部局の
動き

(肝胆膵・移植外科), 万代昌紀 教授(産科婦人科長), 小池 薫 教授(初期診療・救急科長)より各診療領域の「新専門医制度の現状について」, 笠井宏委 特定准教授(臨床研究総合センター)より「臨床研究法の概要紹介」について報告が行われました。

続いて, 医師の働き方改革について, 稲垣病院長より「大学病院で働く医師の働き方改革について」, 黒田知宏 教授(病院長補佐 / 医療情報企画部長)より「京都大学医学部附属病院における労務管理について」, 平岡眞寛 日本赤十字社和歌山医療センター院長より「日本赤十字社和歌山医療センターにおける労務管理」, 細谷 亮 神戸市立医療センター中央市民病院病院長より「当院における医師の働き方改革に関する取り組み状況」について, それぞれ報告が行われました。さらに質疑応答では, 関係病院の先生方との活発な意見交換が行われるなど, 充実した定例総会となりました。



講演する稲垣病院長



講演する平岡院長



講演する細谷病院長

(医学部附属病院)

[目次に戻る ↗](#)

京大病院オープンホスピタル2018を開催

医学部附属病院では, 11月10日(土)に, 「京大病院オープンホスピタル2018」を開催しました。このイベントは, 将来の医療を担う人材および地域住民など多数の方々に, 安全で安心を得られる質の高い医療を提供するため, 院内の各部門が実施している活動内容を紹介し, 京大病院の魅力を伝えることを目的に2006年から毎年開催しているもので, 今年で13回目の開催となりました。

各診療科(部)の取り組みを紹介する「パネル展示」では, 業務内容や取り組み, 器具の展示・取り扱いについて職員が説明し, 来場者の方に現場での活動を知っていただくことができました。また, 疾患栄養治療部のインボディーによるメタボチェックや看護部のハンドマッサージなどの「体験コーナー」, さらに京大病院への就職希望者を対象にした「就職相談コーナー」や「見学ツアー」などさまざまな企画を実施し, 将来医療の道を志しておられる方から近隣住民の方まで多数参加いただき, 大盛況のうちにイベントを終えることができました。



器具の説明を行うスタッフ

部局の
動き

今後もオープンホスピタルを通して、実際に現場で働く職員が自ら京大病院の魅力を伝え、たくさんの方々に医学部附属病院の活動や取り組みを知っていただけるよう努めていきます。



ヘリポート見学の様子



当日の院内の様子

(医学部附属病院)

[目次に戻る ↗](#)

「京都大学・ボゴール農業大学－アジアにおける地球環境学教育・研究に関する国際シンポジウム」を開催

本学との共同主催校であるインドネシア・ボゴール農業大学において、地球環境学の教育・研究連携に関する国際シンポジウムを11月30日(金)～12月2日(日)に開催しました。本シンポジウムは、概算要求機能強化経費や日本学術振興会(JSPS)拠点交流経費の支援、および在インドネシア日本大使館、日本学術振興会、日本学生支援機構の後援のもと実施され、日本インドネシア国交樹立60周年記念事業としても認定されています。アジア9ヶ国38組織(19大学、19企業他)からの研究者や学生、日尼環境関連企業など、合計195名(大学161名、企業他34名)が参加しました。

初日および2日目午前はドディック・リドー・ヌーロマツ ボゴール農業大学副学長による歓迎の挨拶から始まり、6つのサブセッション、ボゴール植物園の見学を行いました。2日目午後には全体セッションが開催され、アルフ・サトリア ボゴール農業大学学長および山極壽一 総長から開会の辞、山口敬一 在インドネシア日本大使館一等書記官から祝辞が述べられた後、本学とボゴール農業大学の学術交流協定延長の調印式、さらに清華大学と本学との間のダブル・ディグリープログラムに関する協定の調印式を執り行いました。続いてエルナン・ルスティ



山極総長による開会の辞



本学およびボゴール農業大学との調印式

部局の
動き

アディ ボゴール農業大学教育プログラム部長および縄田栄治 農学研究科長による基調講演、学生および若手研究者による研究発表などが行われ、サトリア学長および藤井滋穂 地球環境学術教授の挨拶により閉会しました。最終日には、グヌンハリムン国立公園や総合環境・廃棄物処理企業PPLi社へのスタディツアーを実施し、3日間にわたるシンポジウムの全日程は終了しました。

なお、本シンポジウムの期間中には、山極総長、稲葉カヨ 理事・副学長らによるボゴール農業大学学長への表敬訪問を行いました。他にもインドネシア京都大学同窓会（110名参加）、京都-インドネシア・ボゴールの留学フェア（約200名参加）を開催するなど、多岐にわたり大変充実した内容となりました。



若手研究者による研究発表



ポスター発表での活発な討議



シンポジウムでの集合写真

(大学院地球環境学術)

[目次に戻る ↗](#)

インドネシア京都大学同窓会を開催

京都大学ASEAN拠点は、ネットワーク形成を活動目的の1つとしており、ASEAN各国の同窓会活動との連携および推進を目指しています。インドネシア・ボゴールにて、「京都大学・ボゴール農業大学-アジアにおける地球環境学教育・研究に関する国際シンポジウム」の開催に先駆けて、11月29日（金）に、ボゴール農業大学に所属する同窓生、インドネシア京都大学同窓会（HAKU）と連携し、同窓会を共催しました。

同窓会は、ボゴール農業大学の同窓生を代表しエルナン・ルスティアディ 教育プログラム部長、HAKUのスハルマン・ハムザ 会長の挨拶に始まりました。続いて、本学からは稲葉カヨ 理事・副学長が、歓迎のメッセージとともに、第12回東南アジアネットワークフォーラム（10月29日～30日）に続き、今回も多数のインドネシア同窓生が集まったことに驚きと感謝の意を述べました。（フォーラムの様子は本誌P.5135をご覧ください。）

部局の
動き

本会合には、国際シンポジウムに参加する京都大学やボゴール農業大学の教職員や学生に加え、インドネシア各地からの同窓生、ジャカルタ京大のメンバーら40名以上が参加し、総勢110名以上が集いました。参加者同士が盛んに言葉を交わし、終始賑やかな様子でした。最後に、速水洋子 東南アジア地域研究研究所長が今後の同窓生同士のつながりとHAKUのさらなる発展を祈念し、盛会のうちに終了しました。



ウェルカムスピーチを述べる
ルスティアディ教育プログラム部長



ウェルカムスピーチを述べる
ハムザ会長



ウェルカムスピーチを述べる
稲葉理事・副学長



全体集合写真



閉会の挨拶を述べる速水所長

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る](#)

京都-インドネシア・ボゴールの留学フェアを開催

京都-インドネシア・ボゴールの留学フェアが、日本学生支援機構(JASSO)、在インドネシア日本国大使館、本学国際教育交流課の協力のもと、地球環境学堂およびボゴール農業大学の主催により、11月30日(金)に実施されました。400名近くの参加希望者がありましたが会場の都合により200名に制限され、本学への留学に関心がある高校生を含む学生が集まりました。

山極壽一 総長のウェルカムスピーチの後、JASSOからは奨学金について、在インドネシア日本国大使館からは文部科学省奨学金について案内がありました。また国際教育交流課からは本学で学ぶ魅力やプログラムについての紹介がありました。学部進学者を対象としたプログラムでは、国際高等教育院からKYOTO iUPが、工学部からはInternational Course Program in Civil Engineeringが紹介されました。大学院の紹介では、地球環境学堂、農学研究科、工学研究科、人間・環境学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科から各プログラムの特徴について説明がありました。またボゴール農業大学からは、学部および大学院プログラムの案

部局の
動き

内がありました。

プレゼンテーションの最後には、京都大学のグッズなどが当たる抽選会が実施され、ボゴール農業大学のダセ・フナエフィ 国際プログラム事務局副局長、エルナン・ルスティアディ 教育プログラム長、本学の稲葉カヨ 理事・副学長がくじを引き、賑やかに終了しました。

また同時に開催した個別対応セッションブースでは、学生と教員・職員間で活発な質疑応答が交わされました。フェアは盛況のうちに閉会しました。



留学フェアプレゼンテーション



ブースでの相談受付

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る](#)

山極壽一 総長ら一行がボゴール農業大学学長を表敬訪問

山極壽一 総長ら一行は、「京都大学・ボゴール農業大学-アジアにおける地球環境学教育・研究に関する国際シンポジウム」の機会を利用し、ボゴール農業大学 (IPB: Institut Pertanian Bogor) のアリフ・サトリア 学長らを表敬訪問しました。

表敬訪問は、同シンポジウム会場の IICC (IPB International Convention Center) 内にある迎賓室で、シンポジウム中の12月1日(土) 午前11時~午後1時の間に実施され、本学からは、山極総長のほか、稲葉カヨ 理事・副学長、舟川晋也 地球環境学堂長、縄田栄治 農学研究科長、大嶋正裕 工学研究科長、杉山雅人 人間・環境学研究科長、速水洋子 東南アジア地域研究研究所長ら8名が、IPBからは、サトリア学長、アグス・プルワイト 副学長、ドディック・リドー・ヌーロマツト 副学長、スワルディ 農学部長、ウジャン・スマルワン 人間生態学部長ら10名が出席しました。



ルスティアディ教育プログラム部長によるIPBメンバーの紹介 山極総長からサトリア学長へのプレゼント(漆器)

部局の
動き

IPBのエルナン・ルスティアディ 教育プログラム部長によるIPB出席メンバーの紹介と本学の藤井滋穂 教授による本学出席メンバーの紹介から始まり、サトリア学長による歓迎の挨拶、山極総長による訪問の挨拶が行われ、その後、両大学の教育・研究の協働などについて懇談がなされました。続いて、両学長のプレゼント交換があり、集合写真を撮影した後、全員でIICC内に設置されているIPBショップ(IPBが製造している製品(食料品他)の販売店)を見学し、迎賓室に戻って昼食をとりながら、両大学の友好を深めました。



表敬訪問集合写真



サトリア学長からIPBショップ (serambi Botani) 商品のプレゼント

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る ↗](#)

化学研究所「第118回研究発表会」を開催

化学研究所は、11月30日(金)に宇治キャンパスの共同研究棟大セミナー室において、第118回研究発表会を開催しました。

冒頭、辻井敬亘 所長より「化研発表会は長い歴史を持っています。当初は年2回の開催で所内向けの研究紹介の場でありましたが、現在は、化研のアイデンティティーを発信する場としてますますその重要性を増しています。本発表会を通じて一層研究を発展させてもらいたい」旨の挨拶がありました。

午前の部では、上田善弘 助教による「無保護糖の位置選択的官能基化に基づく天然物合成」、高野祥太朗 助教による「海水中Ni, Cu, Zn同位体比一斉分析法の開発、および海洋化学研究への応用」の講演が行われた後、京大化研奨励賞・京大化研学生研究賞の授与式ならびに受賞者7名中5名による講演が行われました。また同棟ライトコートでは66件のポスター発表が開催されました。いずれのセッションも活発な質疑応答が行われ、熱のこもった発表会となりました。



ポスター発表会場



口頭発表会場

部局の
動き



辻井所長と受賞者 7 名

応性を利用した新しい環状曲面 π 共役分子の合成法の開発」と題した講演が行われました。

本研究発表会は、一般、関連研究機関、所内から延べ120名を超える参加者を得て、最先端の多彩な研究成果の判りやすい発表と活発な討論により盛況のうちに終了しました。なお、終了後には化研所属の教職員・大学院生ら多数が参加して、宇治生協会館にて本会の懇親会が行われました。

(化学研究所)

[目次に戻る](#)

第34回(2018)京都賞記念ワークショップ(基礎科学部門)を開催

稲盛財団との共催により、柏原正樹 数理解析研究所特任教授の京都賞受賞(基礎科学部門)を記念したワークショップを11月12日(月)に数理解析研究所において開催しました。

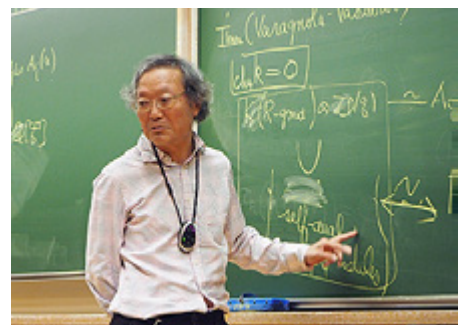
柏原特任教授は、D加群の理論を確立し、代数解析学の構築に決定的な役割を果たしたことが評価され、「現代数学諸分野への多大な貢献：D加群の理論の基礎からの展開」を贈賞理由として第34回(2018)京都賞(基礎科学部門)を受賞しました。本ワークショップは「代数解析学の展望」をテーマに行われ、国内外から100名以上の研究者が参加しました。

ワークショップは山田道夫 数理解析研究所長の挨拶に始まり、河合隆裕 名誉教授による受賞者紹介の後、柏原特任教授が「 \mathfrak{h} ヘッケ環、量子座標環と局所化」と題した基調講演を行いました。受賞者自らが解説する最新の研究内容に、参加者は熱心に聞き入っていました。

続いて、同研究領域における世界的研究者であるソルボンヌ大学のピエール・シャピラ 名誉教授、東京大学大学院数理科学研究科の斎藤 毅 教授、カーン・ノルマンディー大学ニコラ・



開会の挨拶をする山田所長



柏原特任教授による基調講演

部局の
動き

オレーム数学研究所のベルナール・ルクラク 教授，数理解析研究所の荒川知幸 教授がそれぞれの研究に関する講演を行いました。関連する分野の研究者が多く集い，代数解析学分野のますますの発展が期待される充実したワークショップとなりました。



左から，講演を行うシャピラ名誉教授，斎藤教授，ルクラク教授，荒川教授



会場の様子

(数理解析研究所)

[目次に戻る ↗](#)

京都大学福井謙一博士生誕百年記念行事を挙

福井謙一記念研究センターでは，1981年にアジア初のノーベル化学賞を受賞された福井謙一博士の生誕百年を記念する行事として，彬子 女王殿下御臨席のもと，メモリアルシンポジウム，記念式典および祝賀会を，10月12日（金）に百周年時計台記念館において挙

行了。まず，百周年記念ホールにてメモリアルシンポジウムを開催し，田中勝久 福井謙一記念研究センター長の挨拶に続き，福井謙一博士とともにノーベル化学賞を受賞されたRoald Hoffmann 博士，2000年にノーベル化学賞を受賞された白川英樹 博士，古川安 化学史学会前会長の3名が，記念講演を行いました。



Hoffmann 博士による記念講演（メモリアルシンポジウム）
白川博士による記念講演（メモリアルシンポジウム）

部局の 動き

メモリアルシンポジウムには、本学教職員のほか、学術関係機関・学会・産業界等からの参加者ならびに一般参加者等も合わせて、350名を超える参加がありました。参加者は、各講演に熱心に耳を傾け、たいへん好評を得ました。

記念式典では、山極壽一 総長の式辞に続き、彬子 女王殿下よりおことばを賜り、山脇良雄 文部科学省文部科学審議官、西脇隆俊 京都府知事（山下晃正 副知事代読）、門川大作 京都市長（岡田憲和 副市長代理）および里見 進 日本学術振興会理事長より祝辞がありました。



山極総長の式辞（記念式典）



彬子女王殿下のおことば（記念式典）



記念式典の様子



曾我元工化会会長による乾杯の発声（祝賀会）

記念式典終了後、引き続き国際交流ホールにて祝賀会を開催しました。祝賀会は、森迫清貴 京都工芸繊維大学長による祝辞に続き、曾我直弘 元工化会会長による乾杯の発声により始まりました。会場では和やかな雰囲気の中、福井博士の思い出等に話が弾み、同行事は盛会のうちに終了しました。

（福井謙一記念研究センター）

[目次に戻る](#)

部局の
動き

福井謙一博士生誕百年記念サテライトシンポジウムを開催

福井謙一記念研究センターは、1981年にアジア初のノーベル化学賞を受賞された福井謙一博士の生誕百年を記念する行事のひとつとして、10月13日(土)に同センター大会議室にてサテライトシンポジウムを開催し、国内外の研究者、学生等、約60名が参加しました。

本シンポジウムは、福井博士の研究理念を継承し、基礎化学分野の発展に貢献することを目的に設立された福井謙一記念研究センターのこれまでの研究活動を再確認するとともに、基礎化学・理論化学とその周辺分野における最新の研究成果を発表し、議論を深める目的で開催されました。

シンポジウムでは、田中勝久 福井謙一記念研究センター長の挨拶に続き、西本佳央 福井謙一記念研究センター特定助教、John J. Molina 工学研究科助教、畑中美穂 奈良先端科学技術大学院大学特任准教授および長谷川淳也 北海道大学教授による講演が行われました。

また、公募によるポスターセッションおよびディスカッションミーティングが行われ、会場では、夕刻まで参加者による活発な討論が展開されました。



田中センター長による挨拶



畑中特任准教授(左)、長谷川教授(右)の講演



ポスターセッションの様子



参加者集合写真

(福井謙一記念研究センター)

[目次に戻る ↗](#)



第100回 京都大学丸の内セミナー記念式典／特別講演会「人文・社会科学の未来」を開催

京都大学丸の内セミナーは、本学所属の各研究所・センターで行っている最新の研究成果、時宜を得た話題などを、首都圏在住の社会人を対象に情報提供する「大人のための高度な教養講座」と位置づけ、2010年6月（第1回:6月3日）から毎月1回（第1金曜日）開催しています。今回、第100回目を迎えることを記念して11月1日（木）に、東京オフィスにおいて記念式典を、京都アカデミアフォーラムin丸の内において特別講演会「人文・社会科学の未来」を開催しました。

〔第1回～第70回：京都大学附置研究所・センター品川セミナー（於、品川東京オフィス）〕
〔第71回～第100回：京都大学丸の内セミナー（於、丸の内東京オフィス）〕

記念式典には、湊 長博 理事・副学長、東島 清 監事をはじめ各研究所長、センター長等、本学関係者24名が出席し、時任宣博 研究連携基盤長の開会挨拶に続き、湊理事・副学長から祝辞が述べられ、次いで東島監事から乾杯の挨拶がありました。最後に、副基盤長の小柳義夫 ウイルス・再生医科学研究所長（前基盤長）から閉会の挨拶があり、和やかな雰囲気の中、閉会しました。



時任基盤長による
開会挨拶



湊理事・副学長による
来賓挨拶



東島監事による
乾杯のご発声



小柳副基盤長による
閉会挨拶



集合写真

引き続き、会場を隣室の京都アカデミアフォーラムin丸の内に移し、参加者114名（一般参加者90名、本学関係者24名）の満席の中、特別講演会を開催しました。

特別講演会では、「人文・社会科学の未来」をテーマに、石井美保 人文科学研究所准教授が「科学の詩学にむけて」、西山慶彦 経済研究所教授が「計量経済学とEBPM」、広井良

部局の
動き

典 ころの未来研究センター教授が「人口減少社会のデザイン」と題した講演を行いました。講演後、河合俊雄 ころの未来研究センター長の司会進行により、参加者からの疑問や質問を加えながら、講演者によるディスカッションが行われ、参加者は終始熱心に耳を傾けていました。



司会：河合センター長 石井准教授 西山教授 広井教授



特別講演会の様子



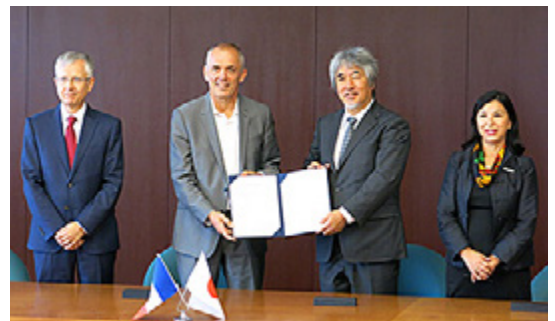
ディスカッションの様子

(研究連携基盤)

[目次に戻る ↗](#)

物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS) がフランス国立科学研究センター (CNRS) と国際共同研究室「スモラボ」を開設，調印式を実施

高等研究院物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS=アイセムス) ではこれまで、北川進 拠点長を中心に、多孔性配位高分子 (PCP) の開発と応用に関する研究について、フランス国立科学研究センター (CNRS) やエア・リキード社と交流を深めてきましたが、この度、CNRS、クロード・ベルナル・リヨン第1大学、パリ国立高等化学学校、パリ科学・人文学研究大学、エア・リキード社



調印式(左から、Queille 副社長、Petit 総裁、山極総長、Pham 副学長)

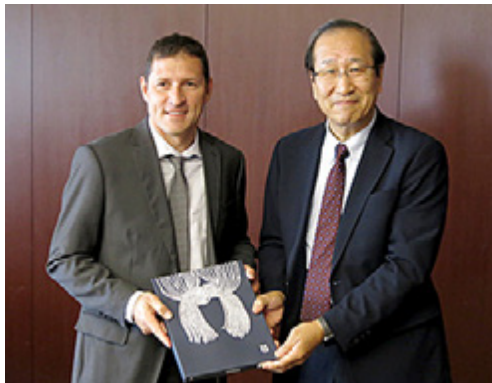
とともに、共同研究室「スモラボ (Small Molecule Lab : LIA-Smolab)」を設立しました。京都大学とCNRSは、2013年に学术交流協定を締結して以来、活発な研究連携を進めています。「スモラボ」は同協定の趣旨に沿って設立され、日仏間の共同研究の新しい基点として活躍が期待されます。

部局の
動き

調印式は10月9日(火)に行われ、山極壽一 総長, Antoine Petit CNRS 総裁, Minh-Hà Pham パリ科学・人文学研究大学副学長, Philippe Queille エア・リキード副社長らが出席しました。署名に先立って研究実施責任者の北川拠点長とCNRSのDavid Farrusseng 主任研究員が共同研究室の説明を行いました。

この共同研究室は、北川拠点長が開発したガスを取り込める無数の小さな穴が空いた材料「多孔性配位高分子(PCP)」の開発・応用を進めるために設立され、日本とフランスの最先端の技術を集結することになります。PCPの第一人者である北川拠点長をはじめ、CNRSのFarrusseng 主任研究員, François-Xavier Coudert 上級研究員など、触媒、分子シミュレーションやモデリング、さらにはガスの分離技術に関する専門家が、それぞれ日仏から参加します。

この連携で、PCPを用いたガスの回収や分離、触媒としての開発がより発展するとともに、京都大学とフランスの研究機関との交流がより深まることが期待されます。



研究実施代表者 (Farrusseng 主任研究員と北川拠点長)

北川拠点長による発表 (研究交流と共同研究室設立について)



出席者集合写真

(高等研究院)

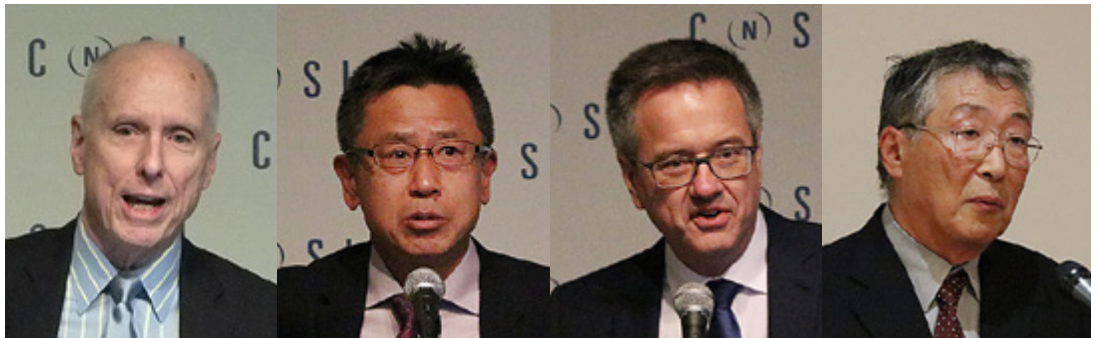
[目次に戻る ↗](#)

米国にて京都大学-UCLA 合同国際シンポジウム「物理学の進展と医学応用」を開催

高等研究院物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS=アイセムス) は、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) にて、京都大学-UCLA 合同国際シンポジウム「物理学の進展と医学応用 (物理学, ナノ材料科学のバイオ, 医療応用)」を11月15日(木)~16日(金)に開催しました。

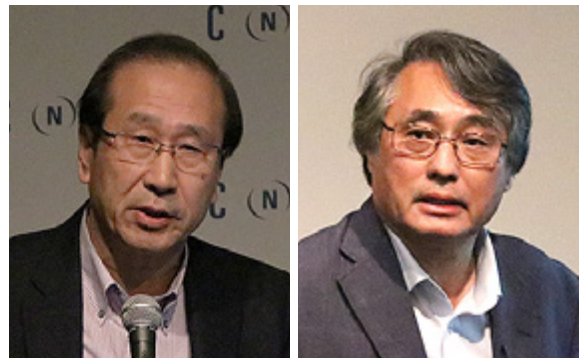
部局の
動き

iCeMSは「物質」と「細胞」の融合研究をテーマとした研究拠点として、分野・領域を超えて研究を続けています。2010年にUCLAのカリフォルニア・ナノシステム研究所(CNSI)と学術交流協定を締結し、2017年からは京都大学-UCLA間のクロスアポイントメント契約となった玉野井冬彦 特定教授を軸として両校間の連携が一層発展しました。今回のシンポジウムは、両校の協力体制の多様化と強化を図るとともに、「融合研究」をテーマに「物理学・ナノ材料・がん研究」という、新たな学際研究への発展に寄与することを目的として開催しました。



左から、挨拶をするワー プロボスト・副学長、河野副学長、ミラー研究所長、田宮センター長

本学からは、河野泰之 副学長(国際戦略担当)・国際戦略本部長、北川進 高等研究院特別教授・iCeMS拠点長をはじめ、教職員13名が参加しました。カリフォルニア大学からは、スコット・ワー UCLAプロボスト・副学長、ジェフ・ミラー CNSI研究所長をはじめ、UCLA, UC Irvineから23名の研究者が講演者およびセッションチェアとして参加しました。



北川拠点長による研究発表 玉野井特定教授による研究発表

2日間にわたるシンポジウムでは、ナノ材料の合成化学、物理学や生物学、ナノ材料の応用(がんおよび感染症、脳神経イメージング、生物活性気体のコントロール)、バイオインタフェースとしてのナノ材料、高分子と生物学などを切り口に、8つのセッションを行い、世界の第一線で活躍する研究者ら24名が発表を行いました。両校および学外機関から180名を超える参加者を得て、異なる分野の研究者が一堂に会して最新の研究成果を共有し議論を交わす機会となりました。また、田宮 徹 日本学術振興会(JSPS)サンフランシスコ研究連絡センター長にもご参加いただき、米国と日本の学術交流推進について歓迎と激励の言葉をいた



CNSI (シンポジウム会場)



シンポジウム会場内の様子

部局の
動き

できました。

このシンポジウムは、研究成果を共有するだけでなく人的交流の機会ともなり、両大学の交流をさらに深化させるうえで非常に有意義なものとなりました。また、UCLAのロジャー・ワキモト 研究担当副学長、シンディ・ファン 国際担当副学長とも、今後の両校の研究連携について意見を交わすことができました。将来的には第2回の合同シンポジウム、またさらなるステップも見据えて、両校の研究連携を一層促進していきます。

【関連リンク】

京都大学-UCLA合同国際シンポジウム (CNSI のWEBサイト) :

<https://cnsi.ucla.edu/events/kyoto-ucla-symposium/>

高等研究院 物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS) :

<http://www.icems.kyoto-u.ac.jp/ja/>



本学からのシンポジウム参加者

(高等研究院)

[目次に戻る ↗](#)

寸言

「偶然」を生み出す
京大の不思議

市森 友明



大学から「寸言」の依頼をいただいた時、私のような若輩者かつとても不出来な卒業生にこのようなものを書く資格があるのか?と正直迷いました。ただ一方で、私のような卒業生も許容されるのが京都大学(以下京大)の懐の広さではないか?と勝手に思い込み、失礼を承知で執筆させていただきます。諸先輩方、何卒お許しください。以下私の経歴を少しだけ説明させていただきます。

大学受験時、京大ギャングスターズのクォーターバックで大スターの東海辰弥さんが高校の野球部の大先輩であったことで、「偶然」にも京大に強烈な憧れを抱き、夏の高校野球予選敗退後、猛勉強をしました(笑)。当時の工学部土木工学科に「偶然」にも入学できました。勉学は苦手な方で、何とか学部卒業で「偶然」にも故郷を同じくする京大の先輩のご推薦により中堅ゼネコンの佐藤工業株式会社に拾っていただきました。入社した平成4年は、バブル崩壊後の景気対策等で、各ゼネコンの業績はそこそこ好調でありましたが、その後、民間開発案件における不良債権や簿外債務が明るみになり、更には小泉政権下での公共投資削減もあり、各社の業績は軒並み右肩下がりとなりました。佐藤工業も債権放棄等の救済処置を受けましたが、「偶然」にも平成14年3月について会社更生法を適用されました。この時は流石に大学時代にもう少し勉強をしておけばよかった、と心底思いました(笑)。

これが転機となり、再三断っていたはずの実父が経営する富山の小さな測量設計会社である新日本コンサルタントに「偶然」にも平成15年4月に入社しました。ただしこの会社、業績はかなり悪く、人生で2度目の倒産経験を覚悟しました。そこからは経営者として再び猛勉強をして、何とか現在では、商圏を関東や関西、東南アジアに拡大し、建設コンサルタントや発電、飲食業等の5つの関連会社を持つそれなりの企業グループに「偶然」にも成長することができました。この間に、京大の関係者の方々には大変助けていただきました。「偶然」にもお誘いいただき今では私が事務局を務めています、土木工学科の同窓会である京土会北陸支部の皆様には色々と経営に関する知恵をいただきました。また「偶然」にも再会した入学時の同級生である京大の藤井 聡 教授には、建設関連産業の景気が悪い中、デフレ脱却や国土強靱化の理論において大きな勇気をいただき、同じく「偶然」にも再会した同級生の神戸大学の石哲教授には、新型降雨レーダーを活用したゲリラ豪雨と浸水予測の共同研究を快く承諾していただき、6年間の研究の後、「偶然」にも国土交通省の実証実験に採択され、そのシステムは富山市に実装されるまでに至り、当社の業績に大きく貢献しました。現在でも京大大学院工学研究科とは橋梁の損傷測定の基礎研究のお手伝いを実施させていただく等、様々なサポートをいただいております。

昨年度からは「偶然」にも京大富山県同窓会の事務局に任命され、会の立ち上げに携わることができました。また次年度には工学部地球工学科国際コースから「偶然」にもインドネシア人が入社することとなりました。このように、私は人生で大きな挫折を経験しておりますが、その後何故か京大に関連する色々な「偶然」に遭遇し、立ち直ることができたと思っています。「寸言」



に登場される諸先輩方は、素晴らしい企業の方々ばかりであり、また卒業生の方々も素晴らしい方々ばかりで大変恐縮ですが、私のような挫折だらけの中堅ベンチャー系のような卒業生もいる「偶然」もご容赦願います。あらためて、京大を志したのも「偶然」、勤めた会社の関係で転職したのも「偶然」、関係者との出会いも「偶然」、寸言の依頼も「偶然」です。「偶然」は卒業生皆に平等…。このような「偶然」を生み出していただけることが京大の不思議な力ではないでしょうか。これからの人生も京大に与えていただける「偶然」を楽しみたいと思います。

(いちもり ともあき, 株式会社新日本コンサルタント代表取締役社長, 平成4年工学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随想

“森づくり”を楽しむ

名誉教授 竹内 典之



昨年(平成30年)11月、京都大学農学部四明会主催による農学部卒業50周年同期生会(昭和43年3月卒業)が開催された。50年ぶりに同期生に会う楽しみもあったが、卒業後さらには70年余を振り返る良い機会かとも思い、出席してみた。

私が生まれ育った京都市嵐山地区では、昭和30年代になるとすでに室町時代には利水用水として利用されていた洛西用水がコンクリート三面張りに改修されてしまったのを手始めに、田畑や近くの森が宅地へと変わっていった。小学生高学年、中学生、高校生時代を通して開発が進むにしたがって、森から人の気配が少しずつ希薄になり、徐々に荒廃するようになった。それとともに、私が近くの森に行く機会も少しずつ減少していき、森の探訪は愛宕山、比叡山から北山さらには比良の山々へと次第に広がっていった。

大学は、京都大学農学部林学科に入学した。大学生、大学院生時代には、夏休みを利用して毎年南アルプスの山地帯、亜高山帯、高山帯へと変化する植物を観察し、屋久島の豊かな森や白神山地のブナの森など日本の多様な森を訪ね歩いた。

昭和46年京都大学農学部附属演習林助手に採用され、農学研究科大学院後期課程を中退することになった。任地は東北道の根釧原野の北西部・標茶町に所在する北海道演習林で、初めての北海道の景観を満喫できると喜んで赴任した。釧路空港着陸前に眼下に見た広大な釧路湿原と大型重機による農地(牧草地)の大規模な開発は、私が初めて見た北海道の景観として今も強烈な印象が残っている。

着任後は、北海道内の森の現状とそれらの森がどの様に使われてきたのかを把握することを目的に調査を始めた。阿寒、知床、大雪などの原始の姿が残っている天然林から放棄された牧草地に再生した若齢の再生林まで、様々な森を訪ね歩いた。この時の経験と得た知識が、以後の“森づくり”の基礎となり、平成15年に森里海連環学創成を目指すフィールド科学教育研究センターの発足へとつながっていった。

“森づくり”には、森の多様性D (genetic diversity, species diversity, ecosystem diversity) の保全に留意し、生産性P (productivity) を確保し、調和B (balance) を保ちながら、その土地の風土C (climate) に合った方法を用いる必要があると考えている。40年余りDPBCを念頭に“明るい森”、“美しい森”、“常に人の気配が感じられる、とくに子供たちの声の聞こえる森”を造ることを目指してきた。近年は、私の“森づくり”に賛同し、一緒に働いてくれる仲間も少しずつではあるが増えてきている。

退職後10年、70代半ばになった今も毎月島根県高津川流域と奈良県東吉野村で、ほぼ2か月に一回長野県黒姫、などで仲間たちと“森づくり”の活動を行っている。理解してくれる仲間たちと一緒に大好きな“森づくり”をし、その森を人々とくに子供たちが楽しんでくれば、これほど幸せなことはない。今後も、体の許す限り“明るい森”、“美しい森”、“子供たちの声が聞こえる森”を少しでも増やしていければと思っている。

(たけうち みちゆき、平成19年退職、元フィールド科学教育研究センター教授、
専門は森林科学・森林資源管理学)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

留学生たちと
接するようになって

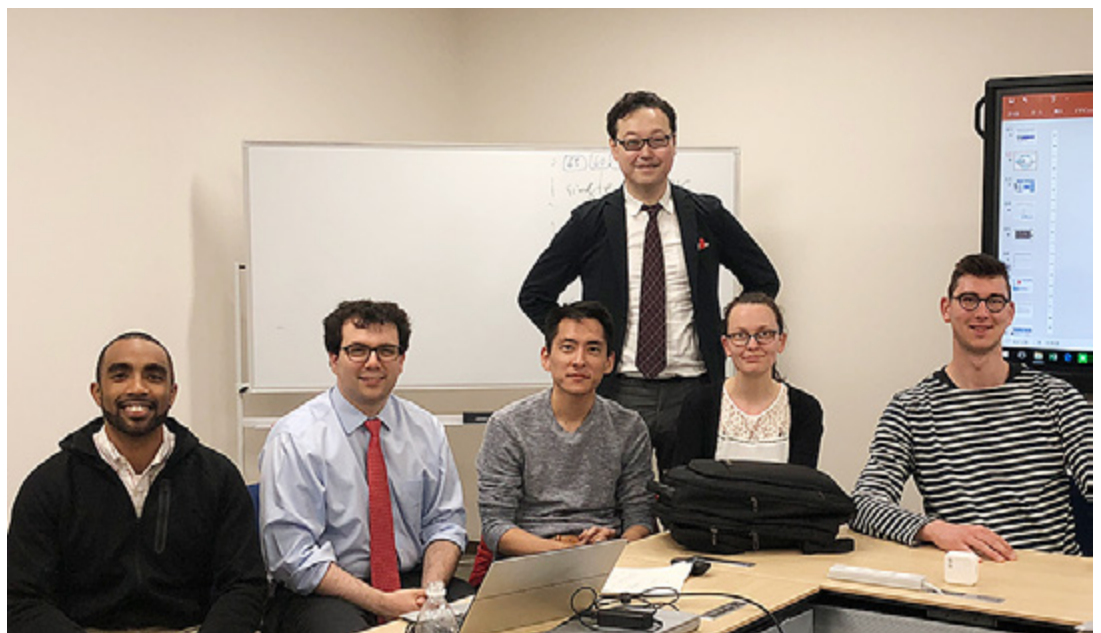
加藤 源太



医学部と部局間連携協定を結んでいる米国ブラウン大学、ドイツのチュービンゲン大学の医学生たちを臨床実習目的の短期留学生として受け入れるようになって、数年が経過した。私の普段の仕事は「全職員の努力をムダなく収入に」つなげられるよう、京大病院の診療報酬請求の円滑化を図ることであるが、留学生を受け入れる1か月間は、前後の準備も含めて、仕事の中身から脳内の思考回路までが大きく切り替わる。

もちろん、京大病院で行われている医療は世界水準の質を備えたものだとは認識している。しかし、患者さんとの会話から診療科内でのカンファレンスに至るまで、京大病院内でのコミュニケーションはほぼ日本語で行われており、これは留学生にとって乗り越えがたい言葉の壁となっている。留学生たちの母校は他にも多くの国・多くの大学と連携協定を締結しており、英語で全て対応できる大学も少なくない。いわば京都大学も他の連携校と競合関係にあるわけで、学生たちの留学先として京都大学が選ばれないならば、場合によっては協定打ち切りという残念な帰結を迎えることとなる。一步海外に出れば、「そこそこの通ったアジアの有力大学の一つに過ぎない」といった程度の認識で、京都大学との連携があっさり切り捨てられることもありうる、ということである。

私は自身の専門性を踏まえ、「医療現場から見える医療政策」というテーマで、留学生たちの受け入れを支援している。臨床現場を見てもらう際、個々の治療内容を教えるだけでなく「どうして日本ではこういった疾病の患者さんが多くやって来るのか」「治療費はどうやって捻出されているのか」といったことを一緒に考え、解説を加えている。こうすることで、学生たちは自国と



留学生との一コマ

洛書

の相違に気づき、興味を持ってくれるのである。こうして、母校の教育では得難い特色を加えることができ、ここ数年は毎年決まった時期に、複数名の留学生が京大を希望してくれる流れが定着してきた。

留学生たちへの指導から刺激を受けることも多い。毎年優秀な留学生がやって来るのでこちらも勉強になるが、米国でトランプ大統領が誕生した際には、初対面の学生たちが早速、食事中の雑談の席でトランプ政権について意見を述べ合っていたのには驚いた。文化の違いがあるとはいえ、政治の話題が自然と出てくる学生たちの姿に、自身の学生時代の姿勢を思い起こして、いささか気恥ずかしくなったこともあった。

忙しいなか、無理を聞いて留学生への対応に尽力してくださっている京大病院はじめ京都大学の関係者の方々、協力いただいている他施設の方々のお力添えに感謝するばかりである。言葉の壁を乗り越えて、日本、京都、そして京都大学のポテンシャルを海外の若き医学生たちに知ってもらえることが、何よりも有難い。同時に、微力ではあるが、より多くの海外の留学生たちにこのポテンシャルを正しく理解してもらいたいと願っている。

(かとう げんた, 医学部附属病院准教授, 専門は医療社会学, 救急医学)

[目次に戻る ↗](#)

話題

平成30年度総長杯ディスクドッジ大会を開催

9月6日(木)、9月7日(金)の2日間にわたり、総合体育館メインフロアにおいて、平成30年度総長杯ディスクドッジ大会が行われ、16チームのエントリーがあり大盛況でした。各試合とも攻守せめぎ合う白熱した展開となり、大きな声援が送られていました。

決勝戦では、医学研究科、医学・病院構内共通事務部の「前回準優勝チーム」(代表者：河村知子)チームが、桂地区(工学研究科)事務部「前回優勝チーム」(代表者：和田晋輔)を下し、見事に優勝しました。試合終了後の表彰式では、宇野圭助 総務部人事課福利厚生室長より優勝、準優勝チームに賞品が授与されました。

最終順位は、以下の通りです。

- 優勝 前回準優勝チーム(医学研究科、医学・病院構内共通事務部)
- 準優勝 前回優勝チーム(桂地区(工学研究科)事務部)
- 第3位 ディスクドッジだほい!(企画・情報部)



優勝した「前回準優勝チーム」



準優勝した「前回優勝チーム」

(総務部(人事課))

[目次に戻る ↗](#)

平成30年度京都大学社寺見学会を実施

11月10日(土)、平成30年度京都大学社寺見学会『大阪堺の名所をたずねて』が行われ、34名が参加しました。南宗寺、堺市博物館、堺市役所21階展望ロビー(いずれも堺市)を巡り、参加者はそれぞれの専門分野の講師の解説に熱心に聞き入っていました。



南宗寺にて記念撮影

話題

南宗寺では禅宗様で建てられた仏殿と庭園を拝観し、堺市博物館では国重文の木造観音菩薩立像を見学、堺市役所21階展望ロビーからは大仙陵古墳を一望しました。

当日、解説いただいた講師は次のとおりです。

(歴史) 元木泰雄 (人間・環境学研究科教授)

(建築) 富島義幸 (工学研究科准教授)

(造園) 柴田昌三 (地球環境学堂教授)

(美術) 根立研介 (文学研究科教授)

(総務部 (人事課))

[目次に戻る ↗](#)

宇治キャンパスで総合防災訓練を実施

宇治キャンパスでは10月29日(月)に、宇治市東消防署の協力のもと宇治市で震度6弱の地震(南海トラフ地震)が発生したことを想定した、総合防災訓練を行いました。

これは京都大学危機管理計画(地震編)に対応する訓練に、地震時の安否確認・情報伝達の要素を加え、負傷者や火災の発生等、現実的な想定のもと、組織的な避難誘導・情報伝達を総合的にシミュレーションしたものです。

教職員で組織する自衛消防地区隊を中心に、その他の教職員、学生などキャンパス全体で総勢1,000名以上が参加し、初期消火や安否情報伝達、避難誘導、負傷者の救護、また避難状況の集計等、さまざまな場面が設定され、参加者は、各自の役割を確認しながら実践しました。また、今回から本学で運用している安否確認システムを使用した情報収集の訓練も行いました。



安否情報を集計する対策本部



宇治市東消防署との情報交換の様子



消火器操作訓練



避難訓練の様子

話題

避難訓練後は、宇治市東消防署の指導による消火器操作訓練も行い、参加者は熱心に説明を聞き、実際に消火器を手にとって体験しました。

訓練終了後には、宇治地区世話部局長の辻井敬亘 化学研究所長の挨拶、吉岡俊二 宇治市東消防署長からの講評の後、消防署の方と自衛消防地区隊を中心とした参加者との意見交換も行われました。



辻井研究所長による挨拶

吉岡署長による講評

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を開催

外国人研究者・留学生に対する支援の一環として、宇治地区関係者から遊休品の提供を受け、無償で外国人研究者・留学生に提供するリサイクルフェアの開催は今年で13回目となり、例年と同様、外国人研究者・留学生と教職員との交流会も同時開催しました。

リサイクルフェア会場となった、宇治おうばくプラザハイブリッドスペースには、関係者の協力により集まった約850点の物品が並べられ、研究者、留学生や、その家族など95名の来場者がありました。

毎年大人気のこの催しは、家具から電化製品、布団類、衣服や食器といった日常用品、子供用雑貨やおもちゃなどさまざまな物が出品され、単身者にも家族連れにも喜ばれており、隣の交流会会場では、参加者はお茶を片手に和やかな雰囲気の中、お互いの交流を深めました。

また、交流会コアタイムには、宇治地区研究所の所長等も参加し、辻井敬亘 化学研究所長による歓迎の挨拶の後、Arivazhagan Rajendran エネルギー理工学研究所講師、塩谷雅



リサイクルフェア会場の様子



交流会の様子



交流会コアタイムでの辻井所長の挨拶

話題

人 生存圏研究所副所長、および中川 一 防災研究所長からも挨拶がありました。

その後、参加者の自己紹介タイムが設けられ、引き続き行われた電化製品等の抽選会で会場は大いに盛り上がりました。

宇治キャンパスでは、年間、外国人研究者約500名、外国人留学生約150名が研究のために来訪、滞在しており、今後もこういった生活支援事業を続けていく予定です。

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催

宇治キャンパスでは11月15日(木)、宇治事業場衛生委員会主催ならびに宇治地区総合環境安全管理センター共催による安全衛生講習会を開催しました。

この講習会は、宇治地区の教職員や大学院生等を対象に「年間安全衛生管理計画」の一環として開催しているもので、今回は、鈴木一博 大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授を講師に迎え、「神経と免疫：「病は気から」のメカニズム」をテーマに講演が行われました。講演では、神経系と免疫系の関連性の接点について解説さ



中村正治 宇治地区総合環境安 講演を行う鈴木教授
全管理センター長による挨拶

れ、また、その関連性の観点から、いかにして病原体から身を守るかについて説明されました。

参加者は興味深い内容に熱心に聞き入り、講演後も質疑応答が続いて盛会のうちに終了しました。



会場の様子

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)